

積年の思いよ届け

港南区支部 広瀬 文子（子）

戦没者 大崎 晴一

戦没地 旧満州

父は五つの時に出征。家族は祖母、姉、弟と私、母の五人。貧乏な農家で、母は寝る間も惜しんで働き私達を育ててくれました。

玉音放送の日、弟は村に蔓延した疫病で死んで仕舞いました。「長男を死なせて仕舞って、お父さんに済まない。」と、母は号泣しました。姉も私も慰めながらオロオロです。

その日から母は狂いました。毎日オモチヤを買ってきては弟のお墓に行き腹這いになって遊ぶのです。家の事は何もしません。働き手のなくなった畑はどの畑も草ぼうぼうです。九つの姉と二人で毎日暑い中、草を取るのですが幾らも捗りません。大嫌いな芋虫と闘いながらの日々でした。そんな時お父さんがいたらと心で泣きました。

間なしに母も元氣になり、相変わらずの貧乏でした。勉強の好きな私は、ノートを買って、鉛筆を買ってとなかなか言い出せませんでした。それどころか学校を帰ると「どこそこの畑に來い」と必ず置手紙、鞆を置いてすぐ畑に。暗くなるまで手伝いました。私は後日勤めに出ましたが日

曜はいつも手伝い、青春など皆無でした。父が恋しかったです。

そんな父を戦後九年待ちました。ある日の引揚者名簿に黒枠で囲まれ「大崎晴一」戦死、とありました。生きているとばかり思い、皆で待ったのに……。私は友に囲まれながら泣き泣き学校へ行きました。可哀想なのは母でした。十九で嫁ぎ、赤紙でとられ二十七の別れでした。以後、寡婦として頑張り、私達を育て上げ九十三才で健在、曾孫二人は大学生です。

さて、一昨年満州の父の墓参が叶いました。一行二十名は「此処はお故郷を何百里……」を胸に、その地、その地で泣きながら廻りました。思うに戦争の遺児は「同志」なのです、今でも仲良しです。極寒の地で誰にも看取られもせず逝った父……御免なさいね。

その時は空に赤トンボが一杯群れていました。その時作った句です。

兵の墓に幾万 トンボ群る
つむの

国境の 父恋ふ木霊 こだま 惜しむ秋

父逝きし 荒野に盆の 月ひとつ

お父さん達の尊い犠牲のお陰で、日本は今平和です。平和ボケで収まり付かない部分もあり、

罰があたりますよね。

さて、私事ですが、今私は分かりのいい夫と仲良く二人暮らしです。子供は二人で、長男は私の憧れの東大に入り活躍中、娘も新聞記者に…。孫は四人出来ました。

お父さん、生んでくれて有難う。

誰もが哭く戦争…。この恐い引き金を誰も引いては不可いけませんね。